小泉信三賞

選択課題4　SNSが無い世界

スライムの皮膚の牛 あなたと私の傷とケア

福田健心（ふくだけんしん）
（沖縄県／私立N高等学校二年）

はじめに――海とドゥルーズ

インターネットはよく海と例えられる。その海とは拡大を続ける海である。今やオリジナルがそうであるように、インターネットは惑星を覆うほどにまで発達した。この海で、私たちは膨大なコンテンツの波をサーフィンしている。私たちは水平線の彼方を眺め、サイバー世界の広大さを感じる。刺激的で際限なく供給される経験に心酔する。ここにいつまでもいられたらいいのにと強く願う。

しかし、穏やかだと思われた波はいつまでも穏やかなわけではない。時に膨大な情報とつながりは波を巨大で重たいものにして、遊泳する人々を呑み込んでしまうことがある。そうなれば、人々は抵抗するすべもなく中傷とフェイクの海原にさらわれる他なくなってしまう。マルクス・ガブリエルによれば「人はソーシャルメディアなどの米国製品を消費しながら楽しんでいると思っているが、実際には窒息している」のである（ガブリエル，2021, p.144）。

だが、これはおかしなことではないだろうか。インターネットが普及する以前、人々は希望を持っていたはずだ。その頃、例えば哲学では社会に根付いた窮屈な秩序からいかに脱するかというところが強調されていた。インターネットがそれを実現してくれるかもしれないという期待があった。哲学者のジル・ドゥルーズは樹木や根のような中心のある関係ではなく、横に広がり中心のない根茎、つまり「リゾーム」の関係性を重要視した。旧来の樹木型の秩序ではなく、自由に広がるリゾームの関係性という図式である。「リゾーム」は時代の要望にかなり合致し、日本では八〇年代頃に広く知られるようになる。人々は「リゾーム」を求めていた。そして九〇年代後半からインターネットが発達し、リゾームな関係性がサイバー空間についに実現することになる。インターネットはこれまでの秩序を多方向的な関係性へと作り替え、人類の言論空間を素晴らしいものにしてくれるはずだった。「しかし、インターネットで関係性が新たに開かれ、旧来の秩序体制が脱構築され、すべてが良くなっていったかといったら、全然そんなことはなかった。（中略）ネットによって皆が発言権を持つようになったのは確かです。だが、それは管理社会の到来でもあった」（千葉，2022, p.58）。

本稿の目的は、一体この海で何が起こっているのかを明らかにすること、そして新しい倫理のモデルを提示することである。それは加速したインターネットの海流で互いに摩擦を起こし、傷を負った私たちを「ケア」へと連れ出す「訂正」の可能性を示すことに他ならない。本稿の主張はこうであ

る。

私たちは「スライムの皮膚の牛」にならなければならない。

2．リセットへの違和感

ブラッドベリの『華氏４５１度』は現代社会に対する風刺的、予言的なＳＦ小説と言える。ここで描かれているのは「本が禁止された世界」であり「人々が考えることを放棄したディストピア」だ。この世界の人々はテレビやラジオなどの娯楽に熱中し、効率化やスピードばかりを重んじていて、熟慮したり、反省的に考えることをしない。人の死や選挙ですら、深く受け止めることができなくなってしまっているのだ。

そんなディストピアで、主人公のガイ・モンターグは「ファイアマン」という名の本を燃やす職業に従事している。彼ははじめ、本を燃やすことに喜びを感じていた。

しかし、クラリスという少女との出会いを機に、この世界への違和感を感じるようになる。次第にモンターグは禁止された本を読むようになり、抵抗運動にも加わっていくことになる。こういったディストピアは現代と驚くほどに重なるものだ。現代社会を痛烈に風刺し、私たちを力強く啓蒙するものでもあるだろう。だが、私はこの小説についても違和感を覚えずにはいられないのである。

『華氏４５１度』は物語の結末で驚くべき展開を見せる。「『あ、あれ！』モンターグが叫んだ。そして戦争がはじまり、その瞬間に終わった」（ブラッドベリ，1953 伊藤訳，2014，p.263）「モンターグは思った、どれだけ多くの都市が死んでしまったのだろう？そしてこの国では、いくつの都市が？百か、千か？」（ブラッドベリ，1953 伊藤訳，2014，p.270）物語の終盤、突如として戦争が起こり、都市は壊滅する。落胆するモンターグ、生き残った仲間たち、本を重んじるメンバーたちは再び社会を再建しようと強く決意する。そして、壊滅した街へと歩んでいくといった結末だ。

この結末でいいのだろうか。もちろん戦争が起きているのだからそれは当たり前の発想だろう。しかし、ここでは更に多くの意味を含ませたいと思う。こうやって没落した社会が「リセット」され、新しい「ルール」で代替されることへの違和感である。哲学者の戸田山和久はＮＨＫの番組『１００分de 名著』の中でこの結末を気に入らないとしている。これも「リセット」への違和感からくるものだ。また、この結末自体「リセット」されかねない危険な世界の状況に対しての皮肉と取ることもできる。しかし「新しいルール」での抜本的代替という含意を否定することはできない。「リセット」や「革命」のもつ暴力性はとても無視できるものではない。だからこそ、モンターグたちは地道な啓蒙を目指していたのではなかったのだろうか。「リセット」という発想はそれこそ、スピード重視のディストピア的な危険性を孕んだものなのではないのだろうか。

3．言語ゲームという秩序、そして逸脱

秩序や関係性をリセットすること、あるいは本を燃やすように、逸脱した要素を排除してしまうこと。これらはウィトゲンシュタインの「言語ゲーム」という概念で説明することができる。「言語ゲーム」とは「言葉の意味は使用によって規定される」ということを説明するある種のアナロジーである。私たちは言語を使って「ゲーム」をプレイしており、そのルールはプレイによって二次的に形作られるものだ。この概念を使って、秩序や関係性、さらにはその逸脱

について説明を試みたい。

例えば会話をするときに、そこには暗黙の了解や会話の雰囲気が生まれる。これも一種の言語ゲームである。社会はそういった会話やルールの集積として大きな言語ゲームを形成しているものだということもできるだろう。そして、それはプレイ、つまり活動によって二次的に発生する。人と人が関係性を持ったときに言語ゲームは自動的に生まれる。そうして発生した言語ゲームに従って私たちは生活をしているのだ。

ならば、言語ゲームに違反したらどうなるのか。空気やノリを読まない発言をしたり、法律や道徳に違反したりしたらどうなるのだろうか。この時に起こるのが「リセット」と「排除」である。既存の言語ゲームが「リセット」され、新たな言語ゲームに代替されるか、言語ゲームからプレイヤーが「排除」されてしまうのだ。『華氏451度』の例からわかるように、これらは暴力性を孕んだものである。過度な暴力や弾圧、不条理な投獄や差別が起こるかもしれない。しかしそれでも、言語ゲームから逸脱するものは常に生まれる。人々が「リゾーム」を望んだように、これまでもこれからも逸脱するものは生まれ続けるに違いない。その度に私たちは「リセット」と「排除」を繰り返すことになるのだろうか。このジレンマを私たちはどう生きるべきなのだろうか。

4．スライムは血を流す

言語ゲームには前章で述べたようなジレンマと「リゾーム」な関係性を考えるにあたって重要な特質がある。それは、言語ゲームのルールは曖昧であり、生成変化していくものだということだ。言語ゲームに明確な規則は存在しない。言語ゲームは関係性の中でぼんやりと浮かび上がってくるものであり、不確かで、生成変化を続ける「スライム」のようなものである。私たちはこのスライムの皮膚を身体にまとって、それを触れ合わせて言語ゲームを形作る。互いのスライムは溶け合い、そして新たな言語ゲーム、新たなスライムへと生成変化していく。このスライムというメタファーこそ新たな倫理の様式を示すものであり、ケアへの可能性を開くものなのだ。

私たちのスライムは時にぶつかる。人やコミュニティはそれぞれ異なるスライムを共有しているからである。互いに溶け合いやすいものもあれば、反発し合うものもあるだろう。互いのスライムがぶつかる時、それも互いに溶け合いにくいものであるとき、それらは摩擦し、傷をつくる。さらに言えば、傷をつくるのはスライム同士に限らない。自然災害や不条理な出来事によって人は無数に傷を負う。そして、傷とは逸脱なのである。スライムの皮膚が破けて、そこから血が流れ出す。傷、そしてここで流れる血とはスライムという秩序では対処できなかった、守ることができなかった例外的な逸脱なのだ。だから、私たちはスライムを「リセット」したり、傷を負った相手を「場違いだ、ここには合わない」として排除しようとする。しかし、ここで本当に行うべきことは自分のスライムでその傷を埋めてあげることではないだろうか。近内悠太は『利他・ケア・傷の倫理学』の中で「利他とは、相手を変えようとするのではなく、自分が変わること」だと述べている（近内，2024，p.221）。相手のスライムのそのままの形状、つまり相手の価値観を肯定するために、自分の価値観＝スライムを変えて、傷を埋める。そしてケアが起こる。近内はこのようなケア、利他行為は既存の言語ゲームに違反してその形を変えることであると言う。つまり、ケアとは既存の秩

序＝道徳からの逸脱であり、道徳を超えたものであると言える。そして、近内は何が正しいかを自分自身で迷い、選び取るこの営みを「道徳」に対して「倫理」と呼んだのである。こうした倫理はスライムを「リセット」してしまうものでも、スライムから誰かを「排除」してしまうものでもなく、スライムの生成変化、スライムの絶えざる「訂正」によって「ケア」を可能にするものである。

5．切断と孤独

しかし、インターネットはただでさえ困難な「倫理」の遂行をより難しいものにしている。それはインターネットがその規模と利便性によって無数に言語ゲームを生み出し、その生成変化を加速させているからである。スライムのふれあいが増えればその分、スライムは摩擦し、傷つく。そして、インターネット空間では無数のコミュニケーションが可能であり、ケアの可能性にも開かれていることが仇となる。人々は傷を埋めるために再び他のスライムと触れ合おうとするが、加速した空間で傷を埋めるような細かい作業を行うことは難しい。さらに、顔の見えない状態や匿名での交流では、相手のスライムの形状も適切な力加減も不確かである。ケアを行おうとすれば更なる摩擦を起こすかもしれない。ここには「リゾーム」のようなつながりが強化されたことによって、むしろ人々は息苦しさを感じるようになるという逆説が存在するのである。私たちは「つながり」すぎた関係性を「切断」しなければならない。そして「孤独」を取り戻す必要がある。

岩内章太郎は『〈私〉を取り戻す哲学』の中で「〈私〉の弱さや脆さ（＝ネガティブなもの）に目をつむることをテクノロジーが可能にし、これらを隠した――もしくは逆に、弱さや脆さを妙に誇張した」と述べている（岩内，2023，p.213）。そういった自分の有限性、例えば自分の傷を逆手にとって、つながりを切断する契機とすることができるのではないだろうか。さらに、谷川嘉浩は『スマホ時代の哲学』のなかで「いつでもどこでも誰とでも接続できて、何でもシェアする関係ばかりが前景化する常時接続の世界において、孤独は、切断の可能性を提示してくれる魅力的なアプローチである」と述べている（谷川，2022，p.150）。私たちは寂しさや傷をインターネットの刺激で押し殺すのではなく、むしろその有限性を自覚するきっかけにして、孤独によって癒える時を待たなければならない。傷はすぐには癒えないが、人々はそのもどかしさに耐える力を取り戻さなければならない。このような、すぐに答えの出ない状態について焦らず、ゆっくりと考え続ける能力、これを「ネガティブ・ケイパビリティ」と呼ぶ。私たちはネガティブ・ケイパビリティを取り戻さなければならない。この実践には自分だけの趣味を持つことや傷つくときはちゃんと受け止める時間を作るといった手法があると谷川は言う。ここには『華氏４５１度』で行われるような読書を取り戻す行為と近しいものがある。さらに、夏目漱石は芥川龍之介と久米正雄に送った手紙に次のように書いている。「牛になる事はどうしても必要です。われわれはとかく馬になりたがるが、牛にはなかなかなり切れないです。（中略）あせっては不可せん」（夏目，1916）。私たちは焦らずに、自らの有限性によってつながりを切断する「牛」にならなければならない。これこそ本稿で主張したい倫理の様式「スライムの皮膚の牛」である。

6．誰がゴッホを殺したか？

「私たちは、対人関係ごとの色んな自分

を、〈個人〉に対して〈分人〉と呼んでいます。分数の分に人。個人が整数だとすれば、分人は分数のイメージです。個人は一人、二人と数える。その一人々々の中にまた、複数の違った分人が存在している」（平野，2012b, p.326）

小説家の平野啓一郎は分人主義という考え方を提唱している。従来の分割できない個人や本当の自分探しの神話を解体し、個人は分割可能であると打ち出したのである。どんな自分の一面も本当の自分なのだ。この分人主義こそ「スライムの皮膚の牛」を完成させ「セルフケア」の可能性へと繋ぐものである。

平野の『空白を満たしなさい』の中で印象的なセリフがある。「どのゴッホが、どのゴッホを殺したんだと思います?」（平野，2012b, p.335）これは数多く並ぶゴッホの自画像の前で、自殺対策ＮＰＯ法人の池端が主人公の徹生に向けて語ったものである。ゴッホは自殺をしたことで知られている。平野の提唱する分人主義に則れば、殺した分人とその対象となる分人がいるはずである。一体、誰がゴッホを殺したのか。「殺そうとしてたんじゃなくて、こっちの麦わら帽子のゴッホたちは、包帯のゴッホを、消そうとしたんじゃないでしょうか? 皆が、この病気のゴッホを重荷に感じて、このゴッホさえいなければ、もっと生きやすいのにって苦しんでた」（平野，2012b, pp.338-9）この徹生のセリフは言語ゲームにおける「排除」の過程とよく似た状況を表している。分人同士が言語ゲームを形作っていると捉える時、言語ゲームの継続はすなわち、生きることを続けることである。私たちはよりよく生きたい。だからこそ、病んでいる自分や恥ずかしい自分がいなくなってしまえばいいのにと考える。「生きたい」の裏返しとしての自殺である。

私たちは弱さや脆さを抱えている。それはどうしようもないことで、自分の愚かさからは逃れることができない。しかし、インターネット空間では自己をデザインすることが可能であり、自らの有限性を自覚することが難しいという一面もある。人々は美しい自分を見せようとする。故に、弱い自分を表出することを過剰に恐れてしまうこともあるだろう。また、ＳＮＳのアカウントを衝動的に消してしまうのはインターネットでの自分の人格が過剰に恥ずかしくなったり、嫌いになったりして、その分人を消してしまおうとするからだとも考えられる。

私たちはそうした弱く、脆い分人をケアする必要がある。弱く、脆くあることを肯定し、「見守る」ことが求められる。他者との「摩擦」や「傷」も、一つの分人なのだという見方もできるだろう。そうした自分と常に一緒にいる必要はないが、自分の抱える愚かさ、苦しさからは簡単には逃れられないのだということは理解しておく必要がある。ただ、傷が癒える時を待つ時間を孤独に過ごす。それも牛が歩むように焦らずに進む必要がある。そうした自分への「セルフケア」は他者へのケアのヒントにもなりうる。

7．インターネットをやめるべきか

ガブリエルはソーシャルメディアは自由民主主義を弱体化させるドラッグであり、私たちはいち早くデジタルデトックスを行うべきであると述べている（ガブリエル，2021）。また、デジタルデトックスの実践はアンデシュ・ハンセンも『スマホ脳』のなかで論じており、これが日本でも話題となったことは記憶に新しい（ハンセン，2019 久山訳，2020）。私たちは単にインターネットをやめるべきなのか。

しかし、谷川はデジタルデトックスを過度に煽る議論は、大半の人が実践できないものになっていると指摘したうえで、「自分だけは大丈夫」と例外処理させてしまうところがあると述べている（谷川，2022，p.202）。

これまで述べてきたように問題は更に根深い。インターネットはあくまで加速装置にすぎず、人々が言語ゲーム、関係性、社会を生み出す以上、摩擦は必ず起こる。しかし近内は、文明が発達するほど傷は多く生まれるが、その傷をケアする治療者も同時に多く生まれるのだと論じている（近内，2024，pp.260-5）。私たちはこれまでずっとそうしてきたし、同時に多くの失敗もしてきた。しかし、その失敗のたびに私たちはスライムというケアの体系の形を日々訂正し続けている。インターネットと社会を論じるとき、インターネットをやめるべきかという問いはその問いの立て方から誤りである。私たちが見るべきはこの摩擦であり、人々の共存に向けての倫理なのだ。

8．終わりに――非暴力の倫理

「私たちは『わかりあおう』とするがゆえに、ときどき少し急ぎすぎてしまう。しかし、『わからない』時間をできるだけ引き伸ばして、その居心地の悪さのなかに少しでも長くいられるようにしよう」（奥村，2024，p.296）このテクストは「スライムの皮膚の牛」の核心をついたものである。私たちは今より素晴らしい人生や今より理想的な社会をいち早く手に入れようとしてしまう。そんなとき、焦ったり、もどかしさ、気持ち悪さに耐えられなかったりして「リセット」や「排除」などの極端な行動を起こしてしまうことがある。それに対し「スライムの皮膚の牛」が示すテーゼはひどくシンプルなものだ。私たちが欲望する完全な人生や完全な社会は存在せず、持続的で現実的な訂正を繰り返す他ないのだという主張である。そのため「スライムの皮膚の牛」はショッキングな現実を突きつける主張でもあり、ただ当たり前のことを言っているだけの主張でもあるのだ。永遠の訂正、つまり、永遠の「対話」を持続させる。そうやって同じテーブルに座っている間だけは、殺し合いを放棄することができる。私たちはこんな当たり前のことすら見つめられなくなっていたのではないだろうか。当たり前のことを見つめて、慎重に物事を顧みて「リセット」と「排除」の誘惑に負けずに忍耐する力「ネガティブ・ケイパビリティ」を取り戻す必要がある。これが失われたとき、世界は簡単に暴力性を帯びてしまう。「スライムの皮膚の牛」はその意味で非暴力の思想であり、そして人々の努力に大きく依存するものだ。私たちの「対話」を守るのは、崇高な理論や巨大なシステムではなくて、人々の逸脱や倫理、ケアといった能動的な努力なのではないだろうか。

〈参考文献〉

マルクス・ガブリエル（著）大野和基（インタビュー・編）高田亜樹（訳）『つながり過ぎた世界の先に』ＰＨＰ新書、二〇二一年
千葉雅也『現代思想入門』講談社現代新書、二〇二二年
レイ・ブラッドベリ（著）伊藤典夫（訳）『華氏４５１度』ハヤカワ文庫（原著：一九五三年）、二〇一四年
１００分de名著 レイ・ブラッドベリ〝華氏４５１度〟（４）「〝記憶〟と〝記録〟が人間を支える」（最終回）ＮＨＫ、二〇二一年六月二十一日放送 テレビ番組
近内悠太『利他・ケア・傷の倫理学』晶文社、二〇二四年
岩内章太郎『〈私〉を取り戻す哲学』講談

社現代新書、二〇一三年
谷川嘉浩『スマホ時代の哲学』ディスカヴァー・トゥエンティワン、二〇二二年
夏目漱石「牛になって人間を押せ」、一九一六年　出典：三好行雄編　pp. 309-12『漱石書簡集』岩波文庫、一九九〇年
平野啓一郎『私とは何か』講談社現代新書、二〇一二年a
平野啓一郎『空白を満たしなさい』講談社（初出：「モーニング」二〇一一年四〇号、二〇一二年三九号掲載）、二〇一二年b
アンデシュ・ハンセン（著）久山葉子（訳）『スマホ脳』新潮新書（原著：二〇一九年）、二〇二〇年
奥村隆『他者といる技法』ちくま学芸文庫（初刊：一九九八年）、二〇二四年
東浩紀『訂正可能性の哲学』ゲンロン叢書、二〇二三年
千葉雅也『動きすぎてはいけない』河出文庫（初刊：二〇一三年）、二〇一七年
千葉雅也『勉強の哲学』文春文庫、二〇二〇年
芳川泰久 堀千晶『ドゥルーズ キーワード89』せりか書房、二〇〇八年
宇野邦一『ドゥルーズ 流動の哲学』講談社学術文庫、二〇二〇年
マーク・キングウェル（著）上岡伸雄（訳）『退屈とポスト・トゥルース』集英社新書（原著：二〇一九年）、二〇二一年